台大日本語文研究第 20 期
2010 年 12 月，頁 61-92
2010-06-21 收稿，2010-08-09 通過刊登

對於動詞「流す」所作的框架結構之分析
—「川に笹舟を流す」句中的「流す」所作的框架為中心—

謝豐地正枝*

摘要

本稿的目的在於究明以下二點:(1)考察動詞所作的框架（frame）的概念及本稿的立場、而圖示動詞「流す」所作的框架的意義構造、(2)分析動詞「流す」所作的框架結構在因爲說話者改變視點而產生表現上的變化時，框架的概念究竟實際上如何發揮其機能。本稿將對這二點以認知意義論上的框架分析法爲基礎，進行分析、並解明。

接下來，藉由依階段分析、考察伴隨說話者視點變化所產生的表現上的變化過程，將明示以下三點：(1) 要怎樣釐清表現上發生變化的過程？總而言之，動詞「流す」所作出的框架結構，與構成顯在化與潛在化的句子成分的所有成員都有關係，(2) 這些成員之間以語言上的關係相互結合，(3) 說話者應該將句子中哪個句子成分焦點化，結果在表現上發生變化時，框架的機能和變化有甚麼樣的關係。

關鍵詞：框架結構、理想的認知模型、基本意思特徵、擴張意思、多義別義語

* 台灣大學日本語文學系教授

An Analysis of the Frame Structure and its Function in the Japanese Verb “nagasu” —Analyzing the Frame Structure Function of “nagasu” in the sample sentence「川に笹舟を流す」—

Hsieh-toyochi, Masae*

Abstract

By applying cognitive linguistic “frame” theory, this paper analyzes the frame structure and its function in the Japanese verb “流す（nagasu）”. The first part of the paper discusses diverse perspectives, presented to clarify the basic semantic concept of the frame theory and to state the author’s view. To summarize the discussion, the frame structure of the verb “nagasu” is illustrated. The second component analyzes the function of the frame structure. The sentence「川に笹舟を流す= I threw a boat made of bamboo leaf into a river, and let it flow down」is used as an example. The paper analyzes in a linear fashion how the frame structure of “nagasu” functions according to the speaker’s changes of expression. These changes are made by shifting the focus of attention to certain parts of speech within the sentence.

In conclusion, this paper illustrates that semantic elements forming the frame structure of “nagasu” include parts of speech verbally communicated by the speaker as well as parts of speech that are latent. Latent semantic elements are not spoken, but exist as elements that form the frame structure. In addition, these latent elements are placed under the semantic condition termed “stand-by.” The paper observes the

* Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

following: (1) latent elements can be activated instantly when the speaker switches the focus of attention; (2) both parts of speech whether spoken or latent are semantically joined and together, form the frame structure; and (3) the function of the frame structure is critical in transforming latent stand-by elements to active participants in the part of speech verbally communicated by the speaker.

Keywords: frame, idelized cognitive model, prototype, semantic extension, polysemic meanings

動詞「流す」のフレーム分析
―「川に笹舟を流す」文中の「流す」を中心に―

謝豊地正枝*

要旨

本稿の目的は、認知言語学の諸理論に基づいて、第一に、動詞が作るフレームの概念に対する諸説を比較して考察し、本稿の立場を明確に述べた上で、「流す」のフレーム構造を図で示すこと、そひて、更に分析を一歩進めて、「川に笹舟を流す」例文中の「流す」が作るフレーム構造が、話し手による「焦点化」の変化につれて文全体に表現上の変化が発生する場合に、フレーム構造がどのように機能するかについて、分析・考察すること、にある。

分析の結果に基づいて、(1)「川に笹舟を流す」例文中の「流す」が作るフレーム構造には、顕在化されている文成分と潜在化されている文成分の二つのカテゴリーに属する構成成員によって形成されていること、(2) これらの全ての構成成員は、意味的な関係によって相互に結ばれていること、そして、(3) 話し手によってある文成分が焦点化された結果、文全体の表現に変化が起こった場合に、「フレーム」の機能が如何に関わっているか、を段階別の分析によって明らかにしたこと、の三点をまとめとして指摘する。

キーワード：フレーム、理想的認知モデル、プロトタイプ、意味的拡張、多義的別義

* 台湾大学日本語文学科教授

動詞「流す」のフレーム分析
―「川に笹舟を流す」文中の「流す」を中心に―

謝豊地正枝

一、はじめに

本稿の目的は、第一に、フレームの概念を考察して本稿の立場を明確にした上で、動作主による物に対するはたらきかけを示す動詞の内、対象語とともに「場所がえ」の結びつきを表す基本的な動詞の一つである「流す」[1]が作る「フレーム」構造を解析して図によって示すこと、第二に、「川に笹舟を流す」文を例にあげて、文中の「流す」のフレーム機能が、話し手の視点の変化が文中の別の文成分に「焦点化」化させることによって、文表現に変化を生じさせる過程にどのように係っているか、を段階別の分析法によって明らかにすること、の二点である。

二、「フレーム（frame）」の概念及び機能に対する考察

（一）「フレーム」の概念に対する考察

1975 年に人口知能の分野でミンスキー（Marvin Minsky）によって提案されたフレームの概念は、「(我々人間が) 新しい状況に直面した時（あるいは現在の問題に対する見方を実質的に変更した時)、記憶の中からフレームと呼ばれる基本的構造を選び出す。これは、人間が記憶している枠組みで、その細部を必要に応じて変更することにより、現実の世界に適合させるものである」[2]と指摘した。これに基づくと、フレームは、我々人間が記憶している、ある状況に置かれた時にどのような要素が組み合わさっているかに基づいて、状

---

[1] 奥田靖雄「を格のかたちをとる名詞と動詞のくみあわせ」『日本語文法・連語論（資料編)』言語学研究会編、むぎ書房、1983 年、P.152-159。

[2] Minsky, Marvin, “Framework for Representing Knowledge” in Patrick H. Winston(ed.) *The Psychology of Computer Vision*, 1975, New York, McGraw-Hill, P.211-277.

況を判断しどのような行動をとるか、を決定するための基盤になっていると考えられる。したがって、フレームとは、我々が状況判断や行動を決定する際に関わる基本的構造になる「(意識上の)枠組み」であることが分かる。

一方、フィルモア（C. J. Fillmore）はもともと格文法論を唱えていたが、独自の観点からフレーム論を発展させ、「フレームとは、まとまりの言語的選択肢の集合で、もっとも単純な場合には単語の集合であるが、文法規則や言語的カテゴリーの選択肢の集合も含まれ、各種の場面のプロトタイプ的な具現例と結びつけることのできるもの」という説を唱えた。1975 年になると、それまで上記のように定義していた自身のフレームの概念に加えて、「関連する複数の要素が一つに統合された具体的な知識の型、或いは、各要素が互いにまとまりをなすような経験から抽出された式型である」という部分を補足して定義した。[3]又、1992 年になると、フィルモアはフレームの概念を更に認知言語学の分野に発展させて、「フレームとはそれなしでは単語が表す概念が意味をなさないような認知構造」であるという、認知論的な視点に基づくフレーム論を展開した。[4]これらの諸説に加えて、ドレスラー（Dressler）は、「フレームとは、何らかの中心概念に関する常識的知識のグローバルなパターンを構成していて、その概念を指す語彙項目は典型的にはそのフレーム全体を活性化する」という説を提唱した。[5]

以上の諸説によると、「言語理解フレーム」には、文中のある単語が表す概念を決定するために、その単語を文成分として含んでいる談話や文章の理解が関わっていることが視野に入っていることが窺える。加えて、ミンスキー説は、フレームの機能に言及し、「典型的

[3] Fillmore, Charles J. ‘’Topics in Lexical Semantics’ in *Current Issues in Linguistic Theory,* R.W. Cole, ed.,1997, Bloomington, London: Indiana University Press, P.76-138.

[4] Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, ‘Toward a Frame-based Lexicon: The Semantics of Risk and its Neighbors’ in *Frames, Fields, and Contrasts,* Adrienne Lehrer and Eva Kittay, eds., 1992, Hillsdale, N.J. Lawrence Erlbaum, Assoc., P.75-102.

[5] ジョン・R・テイラー著、辻幸男、菅井三実ほか訳『認知言語学のための 14 章』紀伊国屋書店、2008 年、P.143-153。

な場面を記述する枠組みとして機能し、話し手と聞き手の双方に適切な理解や推論を行わせる機能がある」と指摘している。尚、フレームには、「知識フレーム（knowledge frame)」と、「相互作用フレーム（interactive frame)」の二種類ある。[6] 現段階におけるフレーム分析と見なされている認知意味論やフレーム意味論は、知識フレームのカテゴリーに属し、「相互作用フレーム」は、発話や談話の理解の分析に関わるものと見なされる。この視点に沿って、本稿は、「知識フレーム」に属する分野における認知論的なフレーム意味論に基づいて、動詞「流す」の作るフレームについて考察を進める。

話し手と聞き手の両者が相手の表現している「流す」の表す概念を相互に理解するには、話し手が用いる「流す」と、聞き手が理解する同じ「流す」という動詞、の間に存在する、「『流す』が作る共通したフレーム」を通して意思伝達を行う。そして、話し手と聞き手の双方は、そのフレームの枠内において、それぞれの語の意味概念が当事者の内のもう一方の語の表す意味概念とどのような意味的な関係に位置づけられるかに基づいて直接的、或いは、間接的な関係を理解する。[7]このことから、もし、両者がそれぞれ「流す」という動詞を用いて表現しても、それぞれの「流す」の作るフレーム構造が異なれば、「話し手と聞き手は共通した『流す』の表す意味領域を共有していない」ために、しばしば意思疎通が困難になる可能性が高いことが分かる。

フレームの概念に基づくと、ある特定の状況、或いは、ある特定の動詞が作るフレームに関わっているのは、言語化された「その特定の動詞」の外にも、「その特定の動詞と意味的に包摂関係」を表す語とか、その特定の動詞と包含関係（意味的に上位と下位カテゴリーに分けられるが意味的に結ばれているもの）を示す語」とか、ま

---

[6] 深田智・仲本康一郎共著、山梨正明編「概念化と意味の世界」研究社、2008年、P.56。

[7] 松本曜、『認知意味論』大修館書店、2003年、P.67。（原典：Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, 'Toward a Frame-Based Lexicon: The Semantics of Risk and its Neighbors' *Ibid*.）

たは、「その特定の動詞と類義関係にあって意味的に相結ばれている語」、などを含む。フレームはこれらの典型的な概念を含んだものの全てによって形成された語群の言語的連合体であるため、その連合体を形成している語は、「認知カテゴリー化された概念を表す語」と呼ばれる。

以上の諸説に加えて、大堀説は、「フレームは日常の経験からスキーマ化を通じて形成された、容易に想起が可能な知識である」[8]と見なす立場を取るが、本稿は大堀説による視点よりも更に一歩進んで、「フレームとは、可能な知識及びその知識を形成する枠組み」であるという立場に立つ。また、このようにカテゴリー化された語群は相互に間接的に結び付けられてフレームを構成しているので、ある特定の動詞、例えば、本稿における動詞「流す」がフレームを構成すると、「流す」に係わるこれらの語群が、話し手によって実際に言語化される、されないに係らず活性化されて「スタンド・バイ」の状態にあると考えられている。

(二)フレームの機能及び認知カテゴリー化された語群に対する考察

フレームには、ある考えとか行動とかを表す動詞とその動詞に意味的に係わりあう典型的な概念を示す機能がある。そして、このような機能は、認知カテゴリー化されている関係にある概念を表す全ての語を同時に活性化させて、ある動詞や語を選んで実際に言語化させるような「基本的な枠組み」を話し手或いは当事者に思い起こさせる。ミンスキーによれば、

(3) Mary was invited to Jack's Party. She wondered if he would like a kite.

という表現に関しては、複雑な推論が関わりあっていると見なす。我々聞き手或いは読み手はこれだけしかない情報から、メアリーがジャックの誕生会に招待されていて、ジャックの誕生日の贈り物として凧が好きか、どうか、思い迷っているという状況であると推論する。このような推論を最も可能にするのがフレームであるとミン

[8] 大堀壽夫『認知言語学』東京大学出版会、2002 年、P.37。

スキー説は指摘する。[9]この場合は、フレームとは、「誰かの誕生日」に関する知識の枠組みであると指摘する。そして、この「誕生会のフレーム」には少なくとも「いつ〔誰の誕生日なのか」、「どこで」、「誰に」、「何を」、「プレゼントする」といった情報を、フレームを構成する知識構造に含んでいる。前述のミンスキー説では、この知識構造には表層において言語的に表明されていない潜在化された情報も暗黙に埋められていると見なす。ミンスキーの視点は、国広説による「ある概念を形成するための潜在化された意味特徴は、ある状況下における表層化された意味概念として具現化されていなくても、圧迫されていながら潜在的に存在している」という視点とほぼ同じ視点であると判断しても過言ではないであろう。

活性化された全ての語群があるフレームを構成している構成成員であったとしても、話し手によって常に言語化されて実際に話されるとは限らないことが、我々がフレームの構造を考えににくい問題と感じる原因の一つではないであろうか。この点に関しては、もし、話し手による視点の変化に伴って、「焦点化」される文成分が別の文成分へと移動して、文表現に変化が乗じる。その変化とは、「ある特定の動詞が作る一つのフレーム」から「別の動詞が作る別の一つのフレーム」へと場面・状況が移行を表現するので、表現法に変化が生じて、別の動詞が作る新たなフレームが構成される、と考えれば、把握し易くなるかも知れない。そして、話し手の視点の変化の結果、「焦点化」された別の動詞が作る新たなフレームを構成する別の構成成員である語群の内、たとえ潜在化されているとは言え認知カテゴリー化されている語群でありさえすれば、相互作用的ネット・ワークの働きによってただちに活性化される。このような機能を示す「フレーム」構造と機能について、ミンスキーは、「『フレーム』とは、定型化された状況・場面を表すデータ構造である」と結論付けたほどである。[10]

---

[9] Marvin Minsky, *The Society of Mind, Touchstone*, New York, 1985, P.261.
[10] Marvin Minsky, 'A Framework for Representing Knowledge' in P.H. Winston, ed.,

尚、語の意味概念に対する認知意味論の諸理論の内、最も中心的な理論はレイコフによる「理想認知モデル（Idealized Cognitive Model)」論である。「ICM」論の特徴は、異なる社会では異なる文化や社会的な判断基準によって違ってくること､同じ社会においても、文脈が異なれば同じ語に対して異なる理想認知モデルが適用されるとする点にある。一方、ラネカーによる「認知領域」説に基づけば、「ある状況・場面において活性化される語の意味構造は、特定の認知領域との関連で特徴付けられる」とみなす。[11]そのため、ラネカーによる「特定の認知領域」の概念も、レイコフによる「ICM」論も､フィルモアによるフレームの概念に類似していることが分かる。前者と後者のよる理論を比較すれば、前者のラネカーによる「認知領域」説[12]の方が、フィルモアによるフレーム説により近いと判断できよう。

金水敏・今仁生美説は、「『フレーム』の概念は[ICM]の一種と考えられる」とみなしており、[13]本稿もこの説に同意する。「ICM」説とフレーム説の二説は相互に類似点もあるが、異なる点としては、理想的認知モデル（ICM）はフレームよりは広い概念であること、そして、フレームを ICM の一種として含んでいるが、フレームの方が ICM よりスコープが狭くて、「当事者がある目的を達成するための一場面、一場面に制限されている」点が ICM とは異なっている。これに対して、スクリプトは、当事者がある目的を達成するために一連に連鎖的に繋がった行動をとる「連続的な行動パターンの組み合わせと典型的な行動パターン」である点がフレームとは異なる。

以上、各理論の異同点を考察した結果、フィルモアの「フレーム」の概念と、テイラー説による「スクリプト（或いは、「シナリオ」）」、

Ibid., P. 211-277.

[11] Ronald W. Langacker, 'A View of Linguistic Semantics,' in *Topics in Cognitive Linguistics*, ed. Brygida Rudzka-Ostyn, John Benjamins, Amsterdam, 1988, P.49-90.

[12] Ronald W. Langacker, *Foundations of Cognitive Grammar—Vol. 1 Theoretical Prerequi- sites*, 1987, Stanford University Press, P.68-91.

[13] 金水敏・今仁生美『意味と文脈』岩波書店、2000 年、P.167。

ラネカーの「領域（意味領域と行動可能な領域を含む）」「相互作用ネット・ワーク」[14] などの概念の全ても、根本的には、レイコフによる「理想認知モデル（ICM）」の一種であると指摘することが出来よう。尚、フレームとスクリプトの相違について、テイラー説は、フレームとは「知識が静的に配置されたもの」であり、それに対して、スクリプトとは「より動的な性質を持っている」と指摘する。[15]最後に、ある特定の動詞の表す概念やフレームを支えて形成する認知カテゴリー化された全ての概念は「相互作用のネット・ワーク」によって相互に結び付けられており、「流す」のフレーム構造を構成する構成成員も例外ではないであろうと推察される。

三、動詞「流す」の作るフレーム構造の分析と考察

この章では、「流す」のイメージ・スキーマを示すこと、更に、「流す」という行為を完結させるための一連の連鎖的な動作・行為の発生と終結に関わる場面的なフレームの機能と、それを構成する構成成分、及び、そのフレームにおける話し手による視点の差異・変化に伴って、焦点化される成分が変化した結果、どのような意味上、表現上の変化が生じるのか、その表現上の変化とその表現上の変化プロセスにフレームの概念の機能が如何に係わっているかを段階別に分析・考察して明確にする。

（一）「流す」を形成するプロトタイプ及び「流す」のイメージ・スキーマの図示

まず、「流す」を含んだ下記の二文例を見られたい。

（4）工事請負人は道路にコールターを流した。

（5）（地上の熱気を冷やすために）私は庭に水を流した。【再掲】

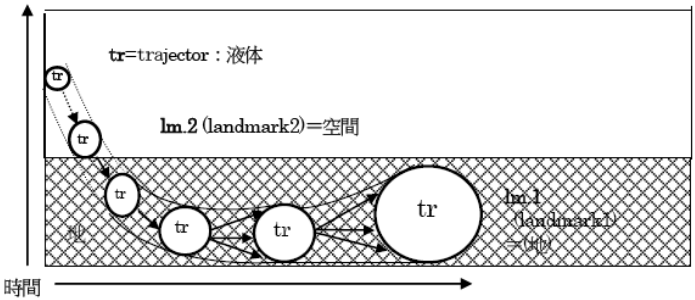
の二文における「流す」の対象物は液体である。そして、「流す」という概念は、＜動作主の加えた力によって動作主の手から離れて

[14] Ronald W. Langacker, ‘Settings, participants, and grammatical relations’ in Savas L. Tsohatzidis ed., *Meanings and Prototypes, Studies on Linguistic Categorization*, 1990, P.213-238.

[15] ジョン・R・テイラー、*ibid.*, 紀伊国屋書店、2008 年、P.145。

空中に投げ落とされて瞬時に移動した対象物である液体を＞＜固体物の表面に接触させて＞＜接触起点から対象物である液体が流れ広がる動きを止めるまでの終着点に向って＞＜接触面上に液体自身の流し広がった痕跡を軌跡として残させながら＞＜不断に液体を移動させる動作・行為＞というプロトタイプによって構成されていることを示している。このプロトタイプによって構成される「流す」の概念を「基本義」と見なせば、「流す」の概念を表すイメージ・スキーマは「図 1」のように示すことができよう。

「図　1」　「流す」の基本義の表すイメージ・スキーマ図



「図 1」における「点線」は、**tr**（トラジェクター（参与者）＝太線の円によって表される）及び **tr** が動作主の手を離れて空間中を瞬時に移動することによるため痕跡を留めない軌跡を示す。また、**tr** が動作主の手から離れて空間中を瞬時に移動して地面（或いはある固体上の表面上）に接触してから、**tr** 自身の流れ広がるさま及びその流れ広がる痕跡の両方が、認知主体の視覚によって認知できるものを「太線及び円」で表す。

「図 1」における**「lm.1」**と**「lm.2」**について、「地＝背景」を成すものを「**lm**」によって示す。「流す」の場合は、空間を「**lm .1**」で示し、液体が接触し移動する固体物の表面を「**lm.2**」として示す。また、ある動作に関わって状況上変化を起こす動作主体は「**tr**=trajector＝(参与者)」と呼ばれる。「図 1」の場合は、動作主（液体を流した人）によって流されて拡張しながら移動する「動作主体

＝「液体」を、「**tr**」として示す。時間軸は、動作主（人）の手から空中に投げ落とされた液体が、ある固体物の表面或いは地面に接触した時点から、時間が経つにつれて、その液体が接触した固体物の表面上に痕跡を残しながら、次第に自身を拡張させて不断に移動しつつ、液体自身の面が広がるさまを示す。「図 1」は、「（液体を）流す」行為には、以上の全てのプロセスが関わっていることを示す。

（二）「流す」の作る「フレーム」構造に対する考察

「流す」は終着点が明確である場合のみに限定されずに不明確である場合でも、下記の（6）文のように「場所がえ」「位置の移動」の意味を表す場合に用いられる。また、（7）文のように、終着点が明確である場合には、「位置移動」の概念に加えて、動作主体がどのような状態で「位置移動」をしたかという、「状況・様態」を表す場合もある。

（6）私は笹舟を川に流した。

（7）秀吉は織田軍の美濃攻撃を有利にするために、木曽の山から伐採した材木を木曾川の河岸で筏に組んで美濃・尾張両藩の藩境にある「洲の又」に向けて流し、その材木を用いて一夜にして洲の又の上に城を築いた。（「流す」は「運ぶ」と交替可能）

の二文において、（6）文中の「流す」は動作主（私）が笹舟を川に浮かべて、その笹舟が川の流れる力（第二動作主）によって川下へ移動するプロセスに焦点を置いた表現である。しかし、どの地点が終着点か、どの地点において笹舟は沈没して消滅するかに関しては不明確であり、終着点に関する事項を表す語はフレームには含まれてはおらず、単に動作主によって笹舟が川に浮かべられた地点から川下に移動するプロセスに関わる語群によって、「流す」の作るフレームが形成されていることが分かる。

一方、（7）文中における「流す」は、木曾の山で伐採された材木が、山の麓を流れている木曽川の河岸から川下にある尾張藩と美濃藩との藩境に位置する洲の又まで、「どのような様態で流されて移動

したのか」に関する情報を得ることができるため、対象物である材木の移動プロセスのみならず、移動時の様態も同時に表現するような「流す」であることが分かる。そして、この（7）文中の「流す」は、「木曾川河岸」という起点と、「美濃藩と尾張藩の藩境に位置する洲の又」という終着点の両方が明確であることが、(6) 文中の「流す」の表す概念とは異なる点である。

次に、「運ぶ」と「流す」のそれぞれの概念を比較する。「運ぶ」は、その動作の対象物を、ある起点から特定の終着点まで移動させるという、「起点と終着点が常に明確であるべき条件下にある動作・行為であること」、また、その位置がえの移動プロセスが人の力によるものか、或いは、何かの機械によって遂行されるのか、という、「移動時の様態の観察のし易さ」、という二点において、明確な条件下にある動作・行為であることが分かる。これに対して、「流す」の方は、(4)「工事請負人はコールターを道路上に流した」文中の「流す」という動作の「終着点」が「道路のある一定の幅内の、起点からある一定の距離内に明確に限定される場合」と、(6)「私は笹舟を川に流した」文中の「流す」のように、「笹舟を川下のどこまで流せばよいのか」という、「終着点が不明確で不確定である場合」の二つの異なる条件下において、いずれの条件下に制限されても用いることができる。すなわち、「終着点が明確であるか、不明確であるか」にかかわらず、両方の場合に動詞「流す」を用いることができるのである。この点を考えれば、「終着点の明確さ、或いは、不明確さ」は「流す」の意味概念を形成する「プロトタイプ」の中心的な意味特徴ではないものと考えられる。また、その移動する動作の「様態」にはあまり焦点が置かれずに、「移動する動作のプロセス」の方により焦点が置かれている点、などが「運ぶ」との意味的な差異として見出される。

しかし、「運ぶ」と「流す」のそれぞれの概念が示すこれらの意味的な相違点の間に、曖昧さがあるのは否めない。それは、（7）文中の「流す」のように、「対象物の終着点が明確である場合」には、文

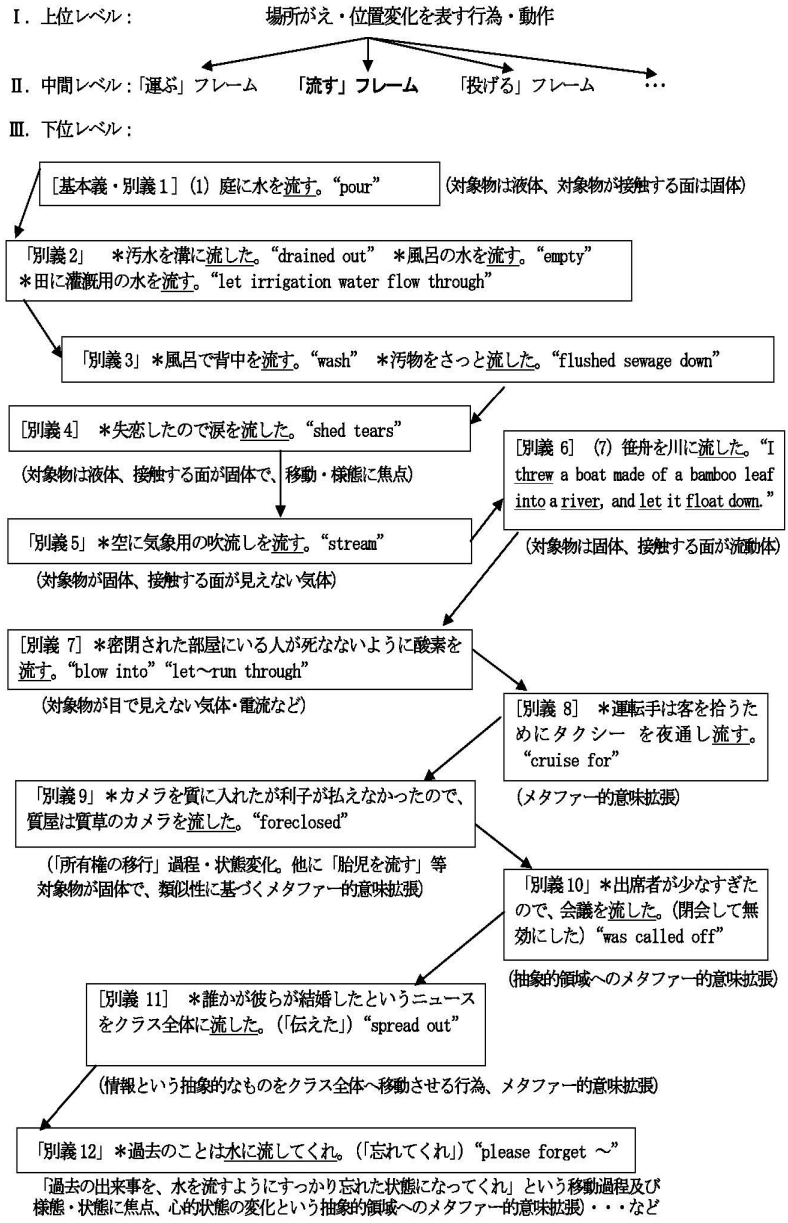
中の「流す」は「運ぶ」と交替可能であり、「流す」が「様態」にも焦点を合わせた表現を表す場合もあることに拠る。「運ぶ」と（7）文中の「流す」とは「交替可能」であるという意味は、言い換えれば、「運ぶ」と「流す」によって表わされるそれぞれの意味領域が、状況によって互いに重なり合う場合もある点が観察できることを指す。このように、二つの異なる動詞によって表わされる意味概念の領域が互いに重なり合う性質を示す場合には、これら二つの動詞の意味的な差異が明確に二分されるということにはならず、「意味的な差異に曖昧さ」が存在する可能性が高いことが指摘できる根拠になろう。

関連して、下記の文例（8）のように、もし、「流す」の対象物である液体を、動作主が「どのように流したか」が文の一成分として具現化されている場合には、「対象物である液体がどのように流されたか」という「様態」に焦点を置いた表現も表すことができる。下記の文例（8）を見られたい。

（8）工事請負人は道路に（ねばねばした）コールターをどろどろと流した。

この部分の考察のまとめとして、「流す」の場合は、「動作主によって加えられた力によって流された主たる対象物である液体」は、「動作主によって加えられた力が有効である時間内において、接触した面上の高い地点から低い地点へと自在に移動する自由が許される点」、また、「液体が流され始めた起点から、液体自身、或いは、液体の痕跡を含んだ一部分を残しながら、起点から不断に移動するプロセスを表す動作」である点、明確な終点地を表す助詞の「まで」よりも、不確定な方向や不特定な終点地を表す助詞「へ」をより多く一緒に用いる傾向がある点、などの諸点が、「運ぶ」の概念とは異なる点であろう。

「図　2」　　**「流す」の概念を作るフレーム構造**



以上の分析・考察に基づくと、「流す」の概念を作るフレーム構造は、意味的に上位、中間、下位のレベルという三層によって形成されており、全体の構造は重層構造を成すと考えられる。それを「図2」として示す。尚、「＊」印は「流す」の多義的別義を含んだ文で、本稿では未呈示の補充文である。「図 2」によれば、「流す」の各概念に対応する英語の動詞には結合する対象語及び流し方によって何種類もの表現法があって細分化されているが、日本語の「流す」の方は細分化されておらず、広い意味領域を占めていることが分かる。

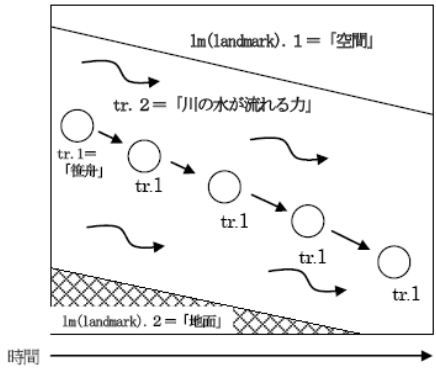
（三）「流す」の多義的別義―［2］の表す概念に対する考察

次に、「流す」の多義的別義の内、別義－[6]の「流す」の概念に対して考察する。この別義－[6]の場合の「流す」は、「流す」の対象物が動作主の手を離れて、動くものの表面上に接触し、その動くものの力によって「流されて移動するプロセス」の概念を表す。この意味を表す「流す」を含んだ文例を下記に示す。

（9）私は川に笹舟を流す。

における「流す」の表す概念は、＜動作主が高い所から低い所へと流れる水力によって不断に流れ動く川面上に、ある具象物を接触させて浮かべてから＞＜水面に浮かんだその具象物を川の流れる力によって移動させ＞＜動作・行為を発生させた起点から＞＜終着点が不確かな別の地点へ不断に動かして移動させる動作・行為＞という意味特徴の組み合わせによって構成される「流す」という概念である。この意味特徴の組み合わせと、「流す」の基本義を支えるプロトタイプとを比較してその典型性の程度を考察すれば、＜動作主の力によって＞＜対象物をある具象物の表面に接触させて、接触した起点から別の地点へ不断に動かして移動させる動作・行為＞という意味特徴に共通性が見出される。このため、（9）文中の「流す」の表す意味概念は、(5)「私は庭に水を流した」文中における「流す」、の表す「基本義」から意味的に拡張した「多義的別義」－［6］であることが分かる。下記に（9）文の概念を表すイメージ・スキーマを「図 3」として示す。

「図　3」　(11)「笹舟を川に流す」の概念を表すイメージ・スキーマ



「図 3」は、「動作主」である「笹舟（を作って、それ）を川面に乗せて浮かべる人」は潜在化されている。笹舟（**tr.1**）に直接力を加えて移動変化を起させる川の水の流れる力が「参与者 2（**tr.2**）として示される。笹舟（**tr.1**）は、川の流れる状態に比較すれば、川面を流されて移動するのが顕著に認知されて、「川」よりも目立って「**図**（前景）」を成している為、「移動変化過程における参与者（トラジェクター1＝（**tr.1**）」として示されている。また、(9)「私は川に笹舟を流す」文においては、話し手が「焦点化」している部分は「笹舟」であるため、「図 3」は「笹舟の移動する変化過程」が同時に直接的な「笹舟の移動経路」を表している。

（四）「流す」の概念が作るフレーム構造と機能に対する段階別分析と考察

関連して、(9)「川に笹舟を流す」における「流す」の概念を表すフレームを構成する認知カテゴリー化された動詞には、顕在化された動作を表すものとして、「笹舟を作る」、「笹舟を手の上に乗せて川辺のある地点まで運ぶ」、「川辺のある地点に来て座る」、「川面に笹舟を乗せて浮かべる」、「笹舟を流す」、などの動詞が関わっていることが観察できよう。これらの潜在化されている動作を表す動詞句と、顕在化されている動作を表す動詞句とを区別したものを「表 1」に示す。

表 1　「流す」の作るフレーム構造を構成する主な構成成員

潜在化・顕在化された動作・行為の差異	「流す」の作るフレーム構造の構成成員
潜在化された動作を表す動詞句	動作主（人）は笹舟を作る
顕在化された動作を表す動詞、但し、表層においては常に具現化されるとは限らない潜在化された構成成員	動作主は笹舟を手の上に乗せて川辺まで運ぶ 動作主は川辺のある地点に来て座る 動作主は川面に笹舟（移動過程における参与者 1＝tr.1）を乗せて浮かべる
顕在化された動作を表す動詞	動作主は笹舟（tr.1）を川に流す 笹舟（tr.1）は川の流れる力（tr.2）によって､川面を移動させられて川下へと流されて行く
潜在化された動作を表す文	動作主は笹舟（tr.1）が浮かべられた川面の起点から川の流れる力（tr.2）によって､川の下手に流されて行くのを見る 笹舟（tr.1）は浮かべられた川面の起点から川の流れる力（tr.2）によって移動させられ､川下へと流されて､ある未確定の所に到達するか､或いは､流されて行く間に川底に沈んで見えなくなる状態になる

「表 1」中の「潜在化された動作を表す動詞句」の項目の内、で、「動作主は川面に笹舟（移動過程における参与者 1＝**tr.1**）を乗せて浮かべる」の部分に対応する英文としては、「I threw a boat made of bamboo leaf into a river」と考えられる。この英語文では「川に乗せて浮かべる＝threw ～into the river」という動詞句によって､既に「川に流す」の意味を表現することができるが、それは、話し手が視点を「川に浮かべる」に置いていて、その部分が焦点化されているため

であろう。ところが、日本語文では「～を川に浮かべる」だけでは、「川に流す」の意味を表現するのは容易ではない。「浮かべた（笹舟）がそのまま川辺の澱みに漂ったまま」になる状態もあるからである。そのため、話し手が「私は川に笹舟を流す」文中の「流す」という「位置の移動」に視点を置いている場合には、全文の表す意味に対応する英語文としては、「I threw a boat made of bamboo leaf into a river, and let it float down」というように、二つの別々の動詞句を用いて、「流す」の動作を表現する必要がある。

次に、(9)「川に笹舟を流す」文における起点部顕在化、中間部顕在化及び潜在化部分、終点部顕在化とその組み合わせを段階別に分析したものを、「表 2」に示す。「表 2」は、「笹舟を川に流す」という動作経路のある部分、例えば、潜在化されてはいるが経路の一部分として存在していながら「動作主（人）が川辺に座って川面に笹舟を乗せて浮かべること」、という動作に関しては、常に復元可能であることを示す。そして、事態フレームの構成要素が顕在化されているものの数の多少にかかわらず、「経路」は常にその全体が概念化されていることになる点に注意したい。それは、認知的な処理に基づけば、「笹舟を川に流す」経路の全体が認知的な表示対象になっているからである。

表 2　起点部顕在化・中間部顕在化部分及び潜在化部分・終点部顕在化及び終点部不確定の場合とその組み合わせ――「川に笹舟を流す」文の場合

1. 単一部分の顕在化と潜在化
a. 起点顕在化――動作主―1（人）は川辺のある地点に座って川面に笹舟を乗せて浮かべる
b. 中間部潜在化――川の水の流れる力（移動過程における参与者 2＝（**tr.2**）が笹舟（移動過程における参与者 1＝（**tr.1**）に力を加える
c. 中間部顕在化――川の水の流れる力（**tr.2**）が川面に浮かべられた笹

舟（**tr.1**）を移動させて川下へと不断に流す

d. 終点部顕在化——笹舟（**tr.1**）は川の流れる力（**tr.2**）が加えられたことによって川下のある終点まで移動させられてある未確定の終点に到達したか、或いは、終点に到達する間に川底に沈んだ状態になって見えなくなる可能性の存在

e. 終点部潜在化、或いは、終点部不確定——笹舟（**tr.1**）は、川の水の流れる力（**tr.2**）によって起点から川下のある未確定の終点に到達させられたか、或いは、終点に到達する間に川底に沈んだ状態になって見えなくなる可能性の存在

2. 複数部分顕在化・及び潜在化

a+b: 起点部顕在化・中間部潜在化——動作主（人）が川辺に座って川面に笹舟**(tr.1)**を 乗せて浮かべる

川の水の流れる力（**tr.2**）が笹舟（**tr.1**）に力を加える

川の水の流れる力（**tr.2**）が川面に浮かんだ笹舟（**tr.1**）を移動させて川下へ流す

c. 中間部顕在化——笹舟（**tr.1**）は川の流れる力（**tr.2**）が加えられたことによって川面を移動させられて川下へと流されて行く

a+d: 起点部顕在化・終点部潜在化——動作主—1（人）が川辺に座って川面に笹舟（**tr.1**）を乗せて浮かべる

笹舟（**tr.1**）は川下のある未確定の終点地に到達したか、或いは、終点に到達する前に川底に沈んで見えなくなった状態になる可能性

c+d: 中間部顕在化・終点部潜在化——川の水の流れる力（**tr.2**）が笹舟（**tr.1**）を動作の起点から川下へと流す

笹舟（**tr.1**）は川の水の流れの力（**tr.2**）によって川面を移動させられて、川下へ流されて行く

笹舟は（**tr.1**）川下のある未確定の終点地に到達したか、或いは、終点に到達する間に川底に沈んだ状態になって見えなくなる可能性の存在

a+c+d: 「経路」全体に対する最大の顕在化—動作主—1（人）が川辺に

座って川面に笹舟を乗せて浮かべ、川面に浮かべられた笹舟が川の流れる力によって起点地から移動させられて川面を川下へと流されて行く状態
3. 動作主—1（人）が川で笹舟を川面に乗せて浮かべたことによって、その動作の起点から笹舟が川の水の流れる力によって流されて、未確定の終点に到達するまで移動させられたか、或いは、終点に到達する間に川底に沈んでみえなくなった状態になる可能性。「図 2」は笹舟が川の流れる力によって川面を流されて移動していくイメージ・スキーマ図を示す。

次に、(9) 文の潜在化されているフレーム構造の構成成員である「笹舟を作る」という部分を「焦点化」して、

(10) 笹舟を作って、川に流す。

というように、表現上の変化を生じさせた言語現象に対して段階別に分析・考察して下記に示す。

表 3　起点部顕在化・中間部顕在化部分及び潜在化部分・終点部顕在化及び終点部不確定の場合とその組み合わせ—「笹舟を作って、川に流す」文の場合

1. 単一部分顕在化・潜在化
a. 起点顕在化——動作主(人)は川辺のある地点で座って川面に笹舟(移動過程における参与者 1＝**「tr.1」**）を乗せて浮かべる
b. 中間部潜在化——川の水の流れの力（移動過程における参与者 2＝**「tr.2」**）が笹舟（**「tr.1」**）に力を加える
c. 中間部顕在化——川の水の流れの力（**「tr.2」**）が笹舟（**「tr.1」**）を川下へと流す笹舟（参与者 1）は川の水の流れる力（**「tr.2」**）によって移動させられて、不断に川下へと流れ下って行く
d. 終点部潜在化——笹舟（**「tr.1」**）は川下のある不確定な終点に到達したか、或いは、終点に到達する間に川底に沈んで見えなくなった状態になる可能性

2. 複数部分顕在化

a+b: 起点部顕在化・中間部潜在化——動作主（人）が川辺に座って川面に笹舟を乗せてて浮かべる

川の水の流れの力（**「tr.2」**）が笹舟（**「tr.1」**）に力を加える

c. 中間部顕在化——動作主—2 である川の水の流れの力が川面に浮かべられた笹舟を、不断に移動させて川下へと流す

笹舟（**「tr.1」**）は川を不断に流れ下って行く

a+d: 起点部顕在化・終点部潜在化——動作主（人）が川辺に座って川面に笹舟を乗せて浮かべる笹舟は川下のある不確定な終点地に到達したか、或いは、終点に到達する間に川底に沈んで見えなくなった状態になる可能性

c+d: 中間部顕在化・終点部潜在化——川の水の流れの力が川面に浮かべられた笹舟を起点から移動させて不断に川下へと流す

笹舟は川の水の流れの力によって川下へと流れて行く

笹舟は川下のある終点地に到達したか、或いは、終点に到達する間に川底に沈んで見えなくなった状態になる可能性

a+c+d: 「経路」全体に対する最大の顕在化——動作主—1（人）が川辺に座って川面に笹舟を乗せて浮かべ、川面に浮かべられた笹舟は川の水の流れる力によって起点地から移動させられて、川下へ不断に流されて行く

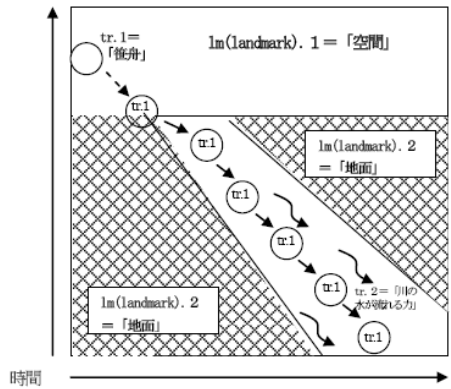
3. 動作主—1 が笹舟を笹の葉で作って川に流したことによって、笹舟（**「tr.1」**）が川の水の流れる力（**「tr.2」**）によって移動させられ、川下に不断に流されて行き、多分不確定な終点に到達したか、或いは、川底に沈んで見えなくなった状態になる可能性。

「図 3」は、動作主－1 が笹舟を作る段階から、それを川辺に座って川面に乗せて浮かべ、笹舟（**「tr.1」**が川の流れる力（**「tr.2」**）によって川面を移動させられ、不断に川下へと流されて行くイメージ・スキーマ図を示す。

関連して、次の「図 4」は、「私は笹舟を作って、川に流す」文の表すイメージ・スキーマを示す。「図 4」は、「笹舟を川に流す」文によって表される概念を構成する成員として、潜在化された「笹舟を作る」「笹舟を手に乗せて、川辺に運ぶ」などの動作・行為は潜在化されており、表層においては具現化されていなくても、「(笹舟を川に) 流す」の作るフレーム構造を構成する成員であること、活性化されて「スタンド・バイ」の状態にあったために、話し手の視点が「笹舟を作る」という動作・行為に焦点化された途端に、「スタンド・バイ」の状態にあった「笹舟を作る」「笹舟を手に乗せて、川辺に運ぶ」等のフレーム構造の構成成員は直ちに表層において具現化されたことを示す。

また、「図 4」は「流す」という動作の発生から終結までの一連の動作には、言語によって具現化されていない「潜在的な各種の動き・作用・働きの組み合わせ」も関わっていることを示す。それらの潜在的な動作には、「動作主―(人＝私) が、B (笹舟) を川辺のある地点 (C) まで運ぶこと」、「そのある地点で座ること」、「笹舟を川面に乗せて浮かべる (E) こと」をした結果、(川の流れる力＝D) によって、E (笹舟が移動を開始する起点) から、F (川下の不特定な終点に到達する移動行為、「川面に浮かんだ笹舟が視界にある限り眺めている認知主体である私」、「笹舟が起点から川下のある不特定な終点までの移動する行為」、或いは、「川下のある不特定な終点まで川の流れる力によって流されて移動する間に川底に沈んで見えなくなってしまう状況」、「ある一定の時間の経過」、などの動き・動作・作用などの組み合わせが含まれていて、同時にそれらは「フレーム」概念の成員であることを示す。

「図　4」　「私は笹舟を作って、川に流す」文の表すイメージ・スキーマ図



以上、「流す」の作る「フレーム」の機能に対する分析と考察の結果、明らかになったことをまとめて、「図 5」に示す。「図 5」内に示されている「平行四辺形・台形・五角形」は「流す」の作るフレーム構造が話し手による「焦点化」によってある文成分が強調される場合に、文成分相互の力関係が変化するさまを示す。「図 5」は、また、それらの潜在化・顕在化された全ての動き・動作・作用などが話し手によって焦点化される対象となり、その焦点化になる対象が変化した場合には、焦点化された対象と焦点化されなかった対象の間には、どのように相互の意味関係と相互の文成分間の結びつきの強弱が変化するか、そして、同時に、どのような相互の結びつきの強弱を基にして、そのような意味上、表現上、変化が生じるか、それらの変化には、フレーム構造による機能がどのように関わっているかを示す。

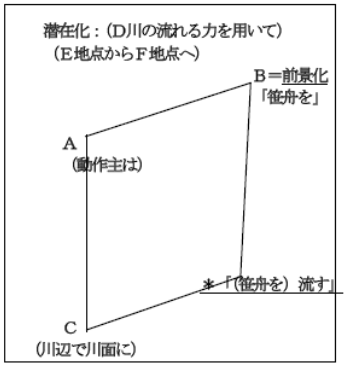
「図 5－①」は、話し手が「笹舟を」という目的語に「視点」を置いて「笹舟を」「焦点化」した場合には、「B＝笹舟」は四角形の上部に位置し、その真下の位置を「D＝流す」という動詞が占めて「笹舟を流す」という動詞句を形成し、文中の各分成分の力関係の中では最も強い関係を示す。もし、話し手の視点が、(9)「私は川に笹舟を流す」では潜在化されている「笹舟が移動変化を起す起点」

に置かれた結果、「C＝川辺で」が焦点化される。この場合には、文中の各分成分の力関係が変化して「図 5－①」から「図 5－②」のように、「川辺」が五角形の最上部の位置を占めるように変化し、「E＝（笹舟を）川面に乗せて浮かべる」部分が、「川辺」の真下に位置して両者の意味関係が強く変化したことを示す。

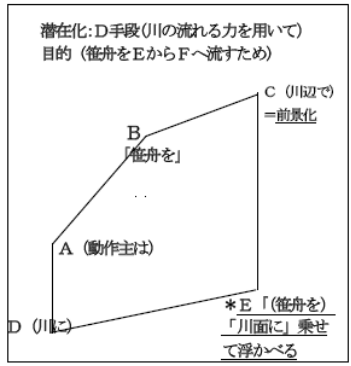
「図　5」　「流す」が作るフレームと動作主が焦点化している構成成分との関係図

文：A（動作主）はB（笹舟）をC（川辺で）D（川の水の流れる力によって）E（起点）からF（終点）まで流す

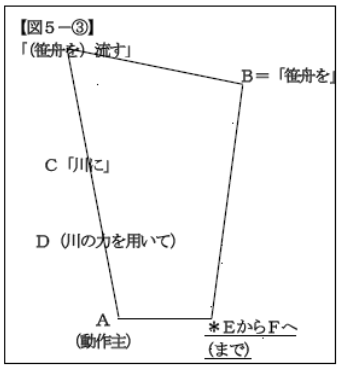
【図5－①】



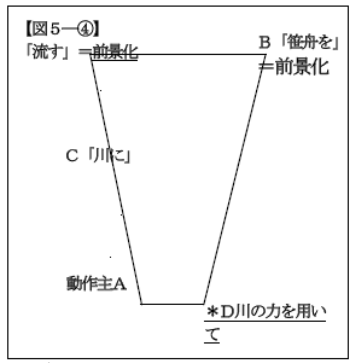
【図5－②】



【図5－③】



【図5－④】



注：1.「川の力を用いて」は「川の水の流れる力を用いて」のメトニミー表現である。

2.「＊」によって示された語句は文中で話し手によって「焦点化」されている語句を示し、「　」内の語句と共に、必ず言語化され、表層において文として具現化される。

3.（　）内の語句はフレーム概念を形成する成員であるが潜在化されており、常に言語によって具現化されるとは限らないものを示す。

また、「図 5－③」は、話し手が「流す」という動詞を視点に置いた場合には、「E で表わされる動詞＝（笹舟を）流す」という動詞句が「焦点化」されて「図（前景）」となるため、四角形の最上部に位置する。この場合、動詞「流す」と名詞「B＝笹舟」は意味的には動詞句を形成しているため、「B＝笹舟」は「流す」と意味的にはほぼ同位の関係にあるほど両者の意味的な関係は強いので、両者は四角形の上部の平行線上を占めるが、「笹舟を」は話し手によって焦点化されていないので、両者の力関係は平等ではなく、「笹舟を」は「流す」よりも多少下部の位置を占めることになる。また、この場合、「E から F へ」という起点から終点への移動過程を表す連用修飾句の部分と動詞「G＝流す」の両者の意味関係もほぼ同等に強いため、「E から F へ」という部分はＢの真下を占めてその力関係の強さを示す。また、例えば、もし、話し手が視点を「笹舟を流す」という動詞句全体を焦点化した場合、その動詞句と「D＝川の流れる力を用いて」という移動方法とが強い意味関係を示すので、この場合の文中の各文成分の間の意味関係の在り方を「図 5－④」のように示すことができよう。

関連して、例えば、もし、話し手が「Ｅ地点（動作主が川面に笹舟を置いた地点）からＦ地点（川下の不特定な地点）へ」という、(9)「私は川に笹舟を流す」文においてはもともと潜在化されていた概念であるフレーム構造の構成成員を、「焦点化」して表層において実際の言語によって具現化した場合には、「ＥからＦへ（まで）」という助詞を伴って明確に表現される。この「Ｅ起点から終点へ（まで）」という語句は、(9)「私は川で笹舟を流す」文においては焦点化されていないので表層においては言語によって具現化されてはいない。しかし、話し手によって、一旦、「焦点化」された場合には、必ず、実際の言語として具現化されて以下のように表現される。

（11）私は笹舟を川面に浮かべて、そこから川下のある終点へ（まで）流した。

において、(9)「私は川に笹舟を流す」文が正しい文であるのは、「E から F へ（まで)」という文成分は潜在化されており、その潜在化されている語群は、(9)「私は川に笹舟を流す」文においては実際には具現化されてはいなくても、常に「スタンド・バイ」の状況下にあって、「私は」「川で」「笹舟を」「流す」等の「笹舟を川に流す」のフレーム構造を構成しているとすれば、「E 地点から F 地点へ（流す)」という連用修飾句が、「笹舟を川に流す」という状況を形成する「フレーム構造」を構成する「潜在化された構成成員の一つ」であることは確かな事実であると判断できよう。

以上の分析と考察によって、フレーム構造を構成する構成成員である諸概念は、互いに繋がれていること、そして、それらは潜在化している成員もあれば、顕在化している成員も存在すること、それらの概念は直ちに言語として表層において具現化されなくても活性化されて「スタンド・バイ」状態に置かれていること、そして、話し手による視点の変化によって焦点化された概念に直接的に関わっていれば、その状況下における意味的に関係がある他の潜在化して「スタンド・バイ」の状態に置かれていた成員も直ちに言語として表層において具現化されることを、動詞「流す」を例に取り上げて、「流す」の作るフレーム構造の概念と機能を例にして解析することによって明らかに示した。

四、今後の課題

本稿では、「流す」の表す概念に対する「スクリプト」分析、及び、「ICM」構図をまとめて比較して示すことができなかった。また、「流す」の目的語となる「タクシーを流す」などの「具象物をある起点地から不確定な終着点・方向に向って不断に移動させる」という概念や、「噂」のような抽象的な概念や、「ガス」のような気体までも目的語にする意味拡張、「無効にさせる」・「失わせる」という概念や、「会を流す」などの「物事を中止する」・「審議せずに閉会にする」という抽象的で否定的な意味概念などを支える意味構造を表示

することができなかった。これらの問題は今後の課題として提起しておきたい。

五、まとめ

以上の分析と考察によって、ある特定の動詞が作る「フレーム」という概念は、その動詞の表す概念のみならず、実際に言語化されている以上に、省略されている部分で連鎖的で連続的な動作の一部を担っているものを含む広い意味領域をカバーすることができる機能があることを、「流す」の作るフレームの機能を例にとって解析することによって明らかにした。そして、「語」の「基本義」から「多義的別義」へと意味的に拡張する場合にも、フレームの機能がその意味的拡張のプロセスにも関わっていることを見出した。その発見は、また、話し手は従来のような話し手によって選択された動詞が要求する主語や目的語のみに視点を置いた表現に制限されずに、段階的なプロセスにおいて省略されている部分で連鎖的で連続的な動作の一部を担っているもの—主語や目的語以外の文成分である挿入句や副詞句など—にも視点を置いて表現法を変化させることを可能にする機能がフレームにあることを示唆する点を指摘して、本稿のまとめとする。

参考文献

文献

大堀壽夫（2002）『認知言語学』東京大学出版会
小原京子（2006）「フレーム意味論と日本語フレームネット」『日本語学』25（5）
金水敏・今仁生美共著（2000）『意味と文脈』岩波書店
言語学研究会編（1983）、『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
新村出編（1990）「広辞苑」岩波書店
深田智、中本康一郎（2008）『概念化と意味の世界』山梨正明編 研究社

松本曜（2003）『認知意味論』大修館書店
籾山洋介・深田智（2003）「意味の拡張」松本曜編『認知意味論』大修館書店
山梨正明（2005）『言語認知』中島平三編『言葉の辞典』朝倉書店
山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版
山梨正明（2005）『認知言語学論考――No.5』ひつじ書房
山梨正明（2006）『認知言語学論考――No.6』ひつじ書房

翻訳書及び外国文献

ウンゲラー, F.／ シュミット, H.J.著、池上嘉彦ほか訳（1998）『認知言語学入門』大修館書店。（原典 : Ungerer & Hans-Jorg Schmid, *An Introduction to Cognitive Linguistics,* by Addison W. Longman Ltd., London,1996.）
テイラー、ジョン・R 著、辻幸夫、菅井三実ほか訳（2008）『認知言語学のための十四章』紀伊国屋書店。（原典 : John R. Taylor, *Linguistic Categorization, Third Edition,Prototypes in Linguistic Theory*）
レイコフ・ジョージ（1998）増補版『認知意味論－言語から見た人間の心』、池上嘉彦・河上誓作ほか訳、紀伊国屋書店。（原典 : George Lakoff, *Womenn,Fire, and Danerous Things—what Categories Reveal about the Mind,* 1987, The U.of Chicago Press.）
Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, 1992 “Toward a frame-based lexicon: The Semantics of RISK and its Neighbors” in *Frames, Fields, and Contrasts,*Adrienne Lehrer and Eva Kittay,eds., Hillsdale, N.J. Lawrence Erlbaum, Assoc.
Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, 1997,“Topics in Lexical Semantics” in *Current Issues in Linguisgtic Theory*, R.W.Cole, ed., Bloomington, London: Indiana University Press.
Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, 2002, *Form and Meaning in Language*, Stanford: CSLI Publications.

Fillmore, Charles J. and Beryl T. Atkins, 2003, *Form and Meaning in Language*, Stanford: CSLI Publications.

Langacker, Ronald W. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar-Vol. 1 Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1988, “A View of Linguistic Semantics,”in Topics in Cognitive Linguistics, ed. Brygida Rudzka-Ostyn, John Benjamins, Amsterdam.

Minsky, Marvin, 1975, “Framework for Representing Knowledge”in Patrick H. Winston (ed.*) The Psychology of Computer Vision*, 1975, New York, McGraw-Hill, P.211-277.

Minsky, Marvin, 1985,*The Society of Mind*, Touchstone, New York.

Sadock,J.M. eds, 1972, *Syntax and Semantics, Vol.8: Grammatical relations*, Academic Press, S.F.

Schank,Roger C. and Abelson, Roger P. 1977 *Scripts, Plans, Goals and Understanding*, Lawrence Erlbaum, Hillsdale, N.Y.

Talmy, Leonard, 1996,‘The Windowing of Attention’ in Masayoshi Shibatani and Sandra A. Thompson, eds, *Grammatical Constructios: Their Form and Meaning*, Oxford University Press, Oxford.

Tannen,Deborah, 1993, “What’s in a Frame?”In: Deborah Tannenn (ed.) *Framing in Discourse*, Oxford: Osford University Press.